

IV部 キャンパスのデザイン



12. アカデミック・コアのデザイン

12.1 コアの全体構成

8.3で述べたように、筑波大学キャンパスのアカデミック・コアは、大学の共同利用的な性格の強い施設だけでなく、さらに大多数の教育・研究のための施設を含んで計画されている。ここに含まれていないのは、居住関係の施設、特殊性の強い研究施設、純粋な管理・サービス施設、大面積を要する農場・運動場等の空間などに限られる。このように、この大学のアカデミック・コアは、実質的な大学活動の領域を示すものであり、その機能の多様性、密集度の高さは意図的に計画されたものであり、その計画上の意図を具現化するためにも、コアのデザインは、複合的で活気に満ちたものであることが要請される。統一のとれた静的な環境よりも、ダイナミックに変化するなかでの全体性を追求することがデザインの方向とされる。

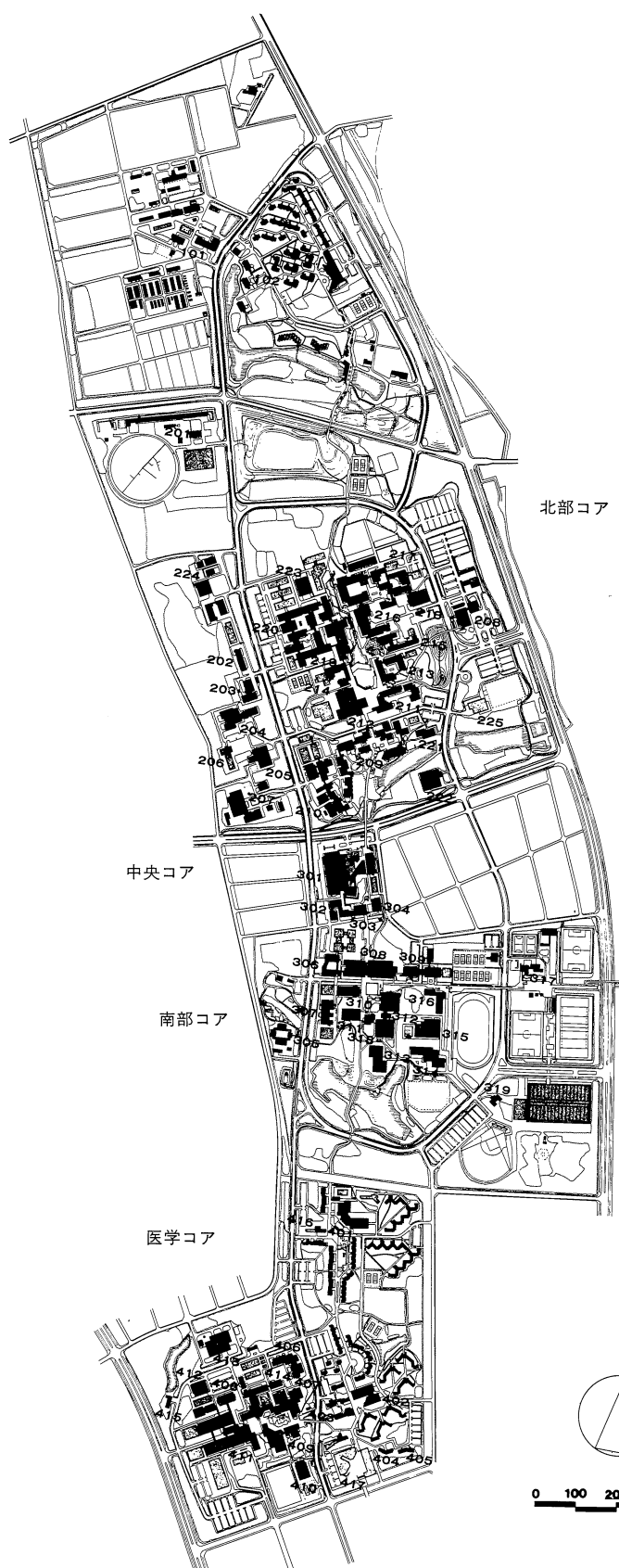
具体的には、中央コア、北部コア、南部コアおよび医学コアの4つのコア・ゾーンから構成されることは前に記したが、前の3者は、メイン・ペデに沿って、ループ道路の内側に連続して配置されており、いわば一体的に構成されているのに対して、医学コアのみは、キャンパスの最南端に、メイン・ペデからも少しはずれて、やや孤立して置かれている。**Fig. 12.1.1**はこれらの関係を示し、それぞれのゾーンに含まれる主要な建築施設の名称を示したものである。

中央コアは、共同利用施設の代表と目される大学会館を中心に、大講堂、計算センター、外国語センター、教育機器センター、保健管理センターと、いずれも全学利用の施設が集められており、対社会的にも最も公開性の強い部分である。したがって、位置的にもキャンパスの本当の中心に置かれ、南北にそれぞれ北部および南部アカデミック・コアに続き、しかも外部からのアクセスも考慮して県道学園平塚線に接している。

北部コアは、もっとも規模が大きく、全学学生数の約3/4がここに集中している。本学最大の中央広場とこれに面して建つ蔵書数120万冊の中央図書館がこのコアの中心となり、その南方に第1学群とその関連の施設、北東に第2学群と関連施設、北西に第3学群と関連施設、という空間構成となっている。したがって、北部コアは、その内容から、さらに中央図書館ブロック、第1学群ブロック、第2学群ブロック、第3学群ブロックの4ブロックに分けられる。しかし一方では、全体として1つのコアをつくり出すような連続性に対する配慮が、動線計画によってなされている。

南部コアは、全学で最初に建てられた体芸中央棟と呼ばれる複合建築を中心に、体育および芸術の両分野に関連する施設が、ニレの広場を取り囲んで配置され、北部コアとは異なる独自のスペースを生み出している。南部コアは東に体育部門が置かれ、さらにその東南方向に各種の体育館やグラウンドといった運動施設に連続しており、西側の芸術部門も工房につながっている。

医学コアは医学関連の多様な施設によって構成されているが、内容的には教育・研究を主としたコア東半の医学学群ブロックと、診療を中心として外部にひらけた西半の附属病院ブロックに2分することができる。学群ブロックは小型のアカシア広場のまわりにひとつの独立圏をつくっており、800床の病棟を中心とする病院ブロックとは機能的に結びながら、空間的には縁を切った構成となっている。



凡 例

- 101 農林技術センター
- 102 一ノ矢学生宿舎
- 201 水理実験センター
- 202 工作センター
- 203 低温センター
- 204 加速器センター
- 205 共同研究棟C
- 206 アイソトープセンター
- 207 分析センター
- 207 中央機械室・実験廃棄物管理棟
- 208 大学本部棟
- 209 第1学群棟
- 210 自然系学系棟
- 211 人文・社会学系棟
- 212 共同研究棟A
- 212 中央図書館
- 213 人間系学系棟
- 214 理科学系棟
- 215 文科学系棟
- 216 第2学群棟
- 217 生物・農林学系棟
- 218 第1体育館
- 219 第3学群棟
- 220 工学系学系棟
- 221 文化系サークル会館
- 222 実験廃水処理施設
- 223 第3体育館
- 224 プラズマ研究センター
- 225 教職員クラブ会館
- 301 大学会館・講堂
- 302 学術情報処理センター
- 303 外国語・教育機器センター
- 304 保健管理センター
- 305 開学記念館
- 306 芸術学系棟
- 307 芸術学系工房
- 308 体芸中央棟
- 309 体育科学系棟
- 310 共同研究棟B
- 310 芸術専門学群棟
- 311 体芸図書館
- 312 総合体育館
- 313 球技体育館
- 314 格技体育館
- 315 屋内プール
- 316 体育センター・体育系サークル会館
- 317 筑波合宿所
- 318 体芸食堂
- 319 クラブハウス
- 401 平砂学生宿舎
- 402 追越学生宿舎
- 403 追越看護婦宿舎
- 404 客員研究員等宿泊施設
- 405 外国人教師等宿泊施設
- 406 医療技術短期大学
- 407 医学専門学群棟・食堂
- 408 医学系学系棟
- 409 医学図書館・臨床講義室
- 410 第2体育館
- 411 附属病院
- 412 動物実験センター
- 413 医学地区中央機械室
- 414 医科学系棟
- 415 医学地区実験廃水処理施設
- 416 非常勤講師等宿泊施設
- 417 文化センター

Fig. 12.1.1 建築施設配置図

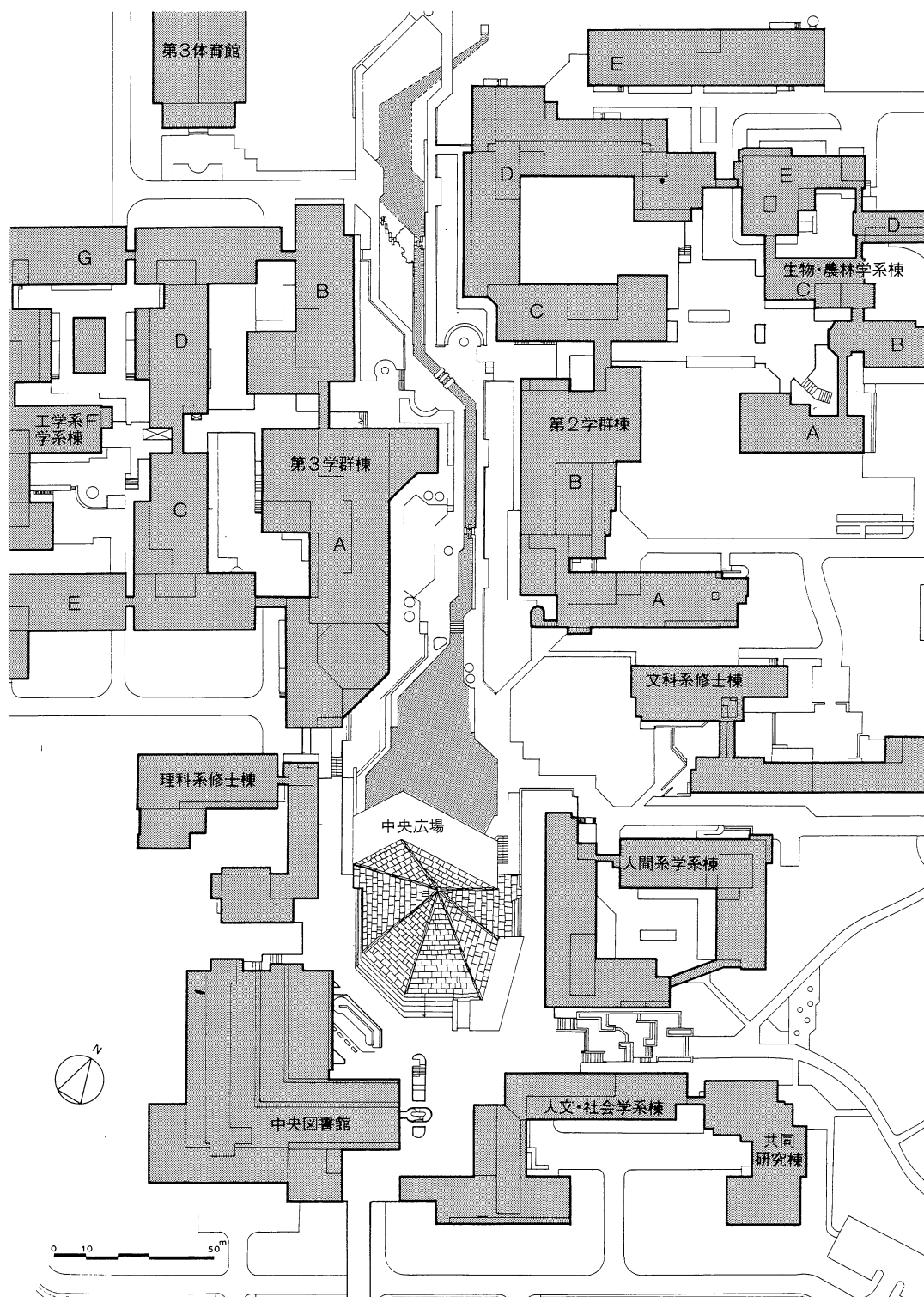


Fig. 12.1.2 中心空間計画図

12.2 中央コア・大学会館ブロック

中央コアは、中央の広場状の空間をとり囲む7棟の建物から構成されているが、さらに1棟分の増築予定地があり、ここにも建築された段階で、完全に閉鎖的な広場となるように計画されている。7棟の建物はそれぞれ、大学会館A棟（ホール）、同B棟（モール）、大講堂、国際交流会館、学術情報処理センター（計算センター）、教育関係センター（外国語および教育機器）、保健管理センターである。これらは互に建築として一体化されたり、ペデ・デッキによって結ばれていて、全体としてひとつの大きな複合ビルとなるよう計画されている。メイン・ペデはこの広場の東側を、レベルを変化させながら通過しているが、これにそって大学会館B棟のショッピング・モールが配置され、郵便局、旅行代理店、衣料品店、画材・文具店、銀行キャッシュ・カードスタンドが並び、その上階が丸善ブック・ストア、3階がホテルである。500席の小ホールをもつA棟は、中庭に突き出すように2階分吹抜け、総ガラスのレストランが中心で、その上にレセプション・ホール、数室の集会室、喫茶室、ギャラリーがあり、1700席の大ホール（講堂）につながり、さらに200席の国際会議室を中心とする国際交流会館まで一体の建築である。このレストランと南側の建物との間は庭園風のサンクした中庭であるのに対し、レストランの北側の広場はコリント風の石柱を中心とする階段状のプレーンな空間となっている。

設計 建築 榎 文彦
広場 同 上

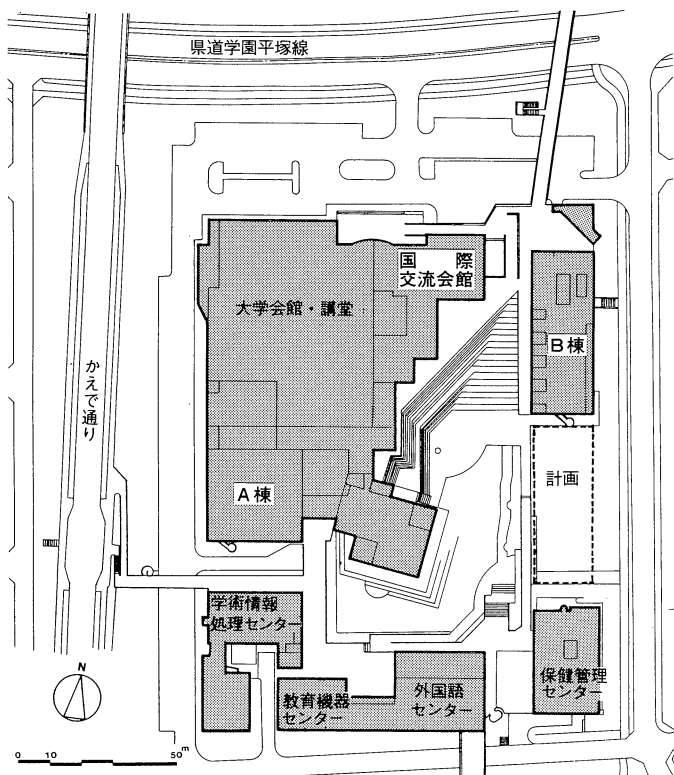
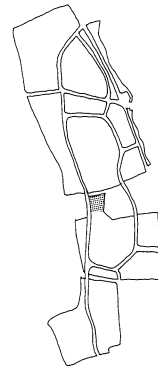


Fig. 12.2.1 中央コア配置図

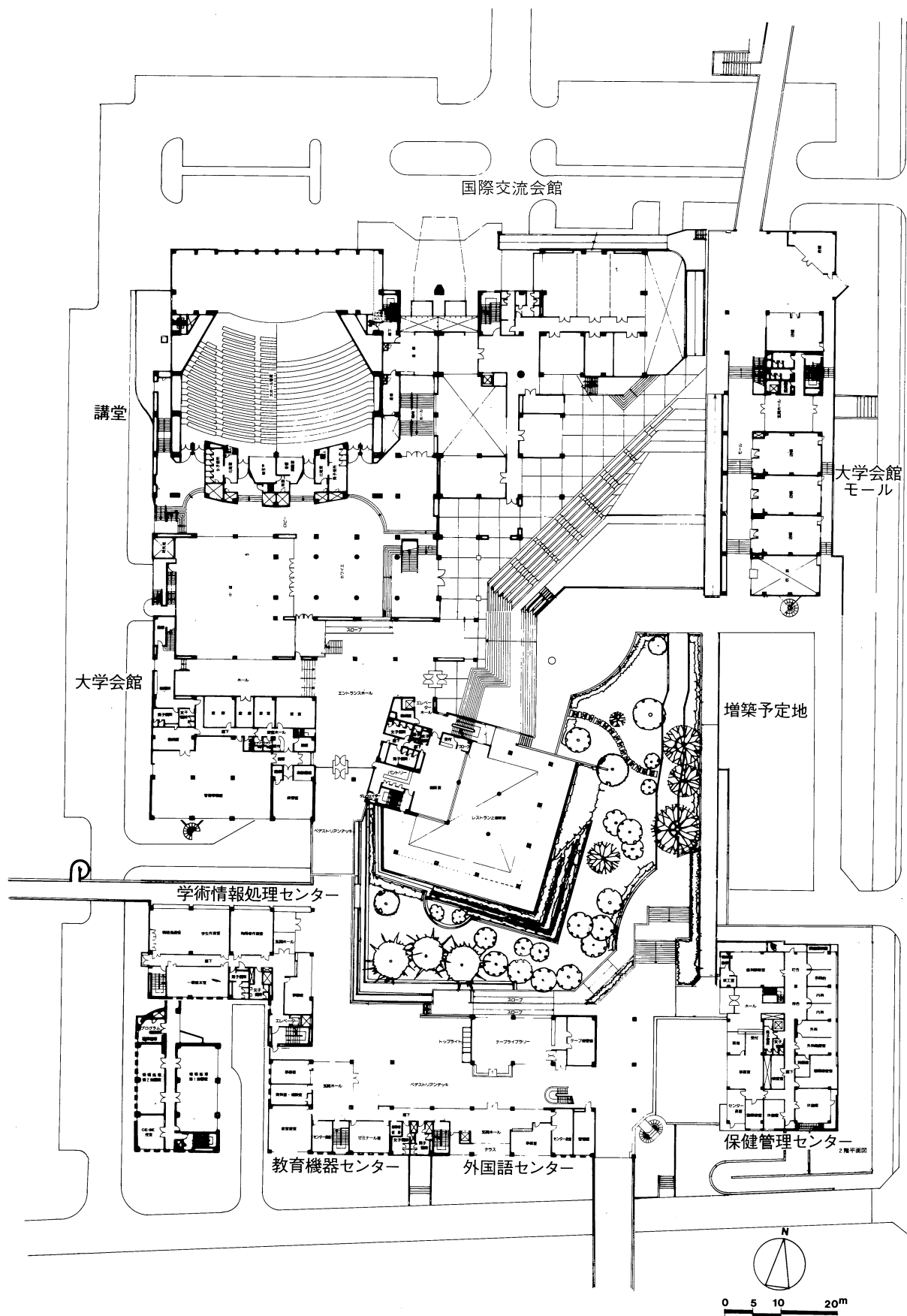
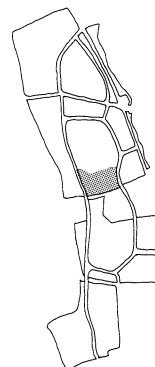


Fig. 12.2.2 中央コア主階平面図 (2 F)



設計 建築 高橋 静一
岡田 新一
広場 岡田 新一
土肥 博至

12.3 北部コア・第1学群ブロック

第1学群ブロックは、北部コアの中では最初に設計がされた地区であり、アカデミック・コアの中では、他の地区とは異なる分散形式の、比較的低密度なデザインが行われた、やや特殊な地区である。しかし、デザインのプロセスについては、この地区での進め方が筑波のデザイン方式の典型をなすものであり、しかももっとも徹底してそれが試みられた地区でもある。そうした意味で、この地区の主要部を占め、全体の空間構成を決定づけている第1学群の計画について少し詳しくそのプロセスを振り返ってみることにしたい。

1. 計画のプロセス（基本計画）

1974年4月から学生を受入れることが決定されていた第1学群（入学定員400人、学生数1,600人）の施設計画が始められたのはその2年前の72年春からである。はじめから初年度の74年は先行する体育専門学群の施設を暫定利用する計画で、75年春に独自の施設を使用することが目標とされていた。したがって、建築の完成まで、約3年間であったが、これは外的諸条件が流動的な状況の中では、決して充分な時間とはいえない。筑波大学そのものができるのかどうかも未定であり（これが正式に決定されたのは翌73年9月）、キャンパスのマスタープランも、大筋は決っていたとはいえ、流動的であった（これも同じく73年7月にはほぼ決定される）。第1学群施設の基本設計が終るのは後述するように73年10月であるから、様々な外的条件が煮詰められてゆく過程と第1学群施設の計画設計のプロセスとは、全く同時並行的に進んだのである。

第1学群の計画は、教育計画（アカデミック・プラン）と施設基本計画とが、相互に連絡をとりながら進行したが、前者は「第1学群連絡委員会」が、後者は「施設環境計画チーム（施設ワーク）」が中心となって行った。この段階での検討事項およびそれらの相互関係を示したものが **Fig. 12.3.1** であり、ここに示された各アイテムを1つずつチェックし、決定しながら計画は進められた。第1学群は、**Tab. 5.1.1** に示したように、人文、社会、自然の3学類から構成され、それぞれの学類は、人文が哲学、史学、考古学、民族学、言語学、社会が法学、政治学、経済学、社会学、自然が数学、物理学、化学、地球科学の各学問分野を含んでいる。施設計画の基本方針としては、各分野毎に独立した空間設備を用意するのではなく、共同化できるものはできる限り共同化して、専門分化による弊害を最小限にとどめることを意図してその可能性を追求した。結果としては、1、2年次生の教育に関する施設は全面的に共同化して学群1本として計画することが可能となり、3、4年次の専門段階においても、人文学群と社会学類は共同化することになった。実験をとまなう自然科学類の各分野については困難が多かったが、その一部（主として講義室）は学類共同とし、実験室のみを各分野別に配置すること、しかし実験室の規模については数タイプに整理、統一することが決定された。

各分野の教官との長期にわたる調整協議と、7章に述べた建築の面積基準とにもとづいて、**Tab. 12.3.1** に示す、第1学群施設基本計画が、施設ワークによって73年春にまとめられた。これによれば、総面積が約24,000 m²、これがほぼ1/2づつ、2期にわかれて建設される。施設ワークではこの面積計画と並行して空間的な条件

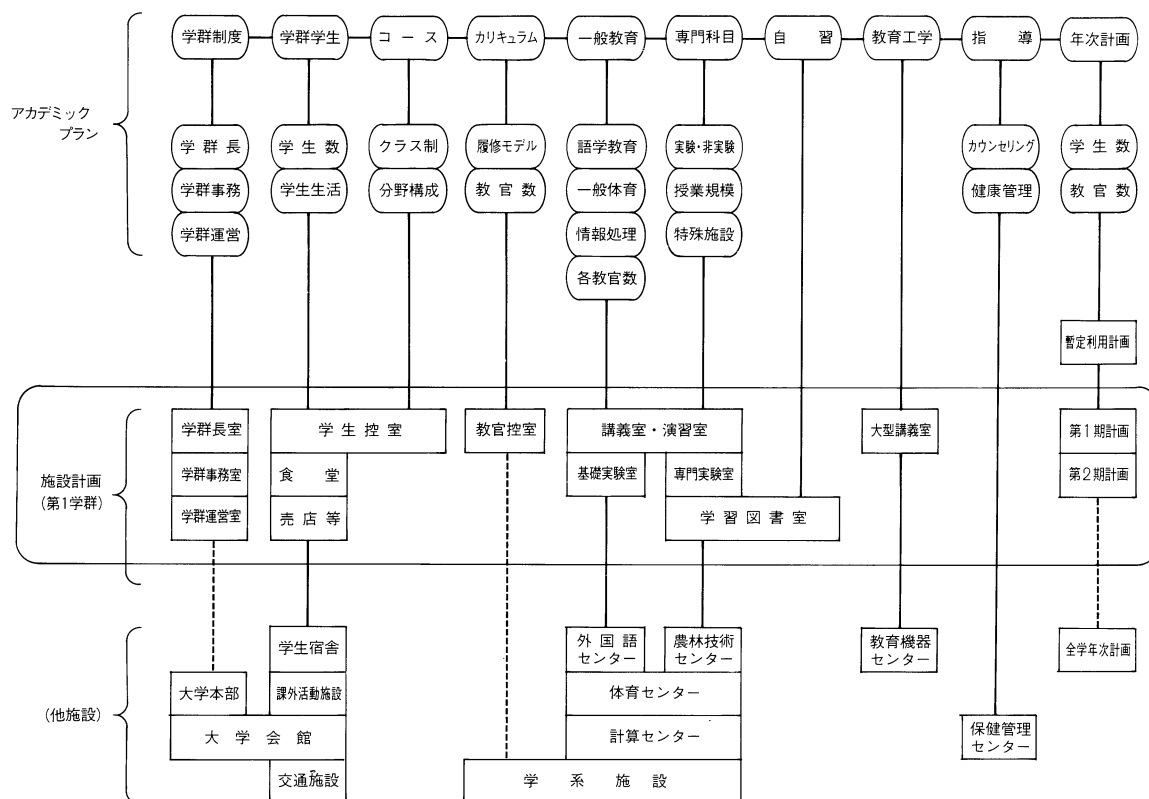
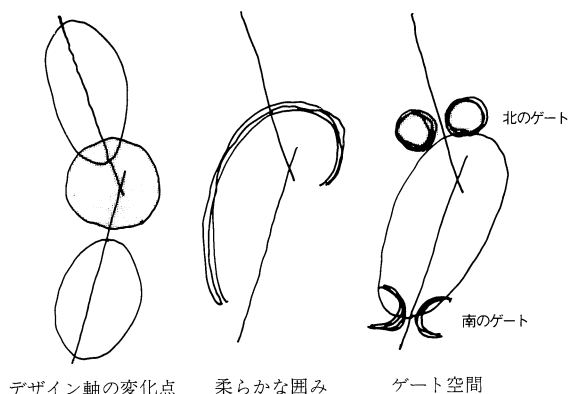
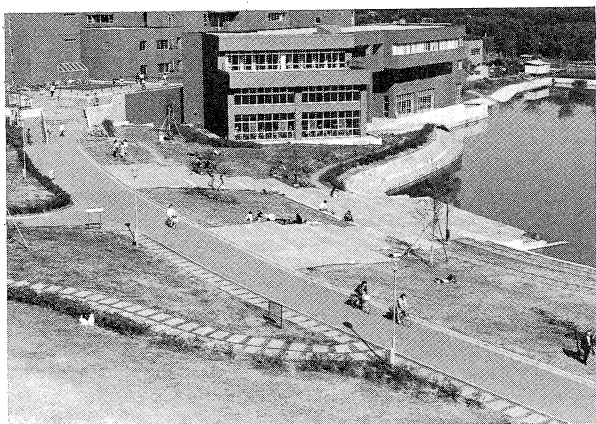


Fig. 12.3.1 第1学群計画

Tab. 12.3.1 第1学群施設面積計画表

室名	室数	1室面積	ネット面積	総面積	備考	室名	室数	1室面積	ネット面積	総面積	備考
〔学群共通部分〕= I 期計画						〔専門教育部分〕= II 期計画					
○基礎教育						○人文・社会					
講義室 A:40人	(室) 10	(㎡) 56.3	(㎡) 563			講義室 A:40人	(室) 6	(㎡) 56.3	(㎡) 338		
" B:80人	6	84.4	506			" B:80人	4	84.4	338		
" C:120人	2	154.7	309			演習室 (20人)	12	37.5	450		
" D:200人	2	253.1	506			実習・資料室	4	56.3	225		
演習室 (20人)	10	37.5	375			学生控室	(0.9㎡/人) 1	112.5	360		
基礎実験室 (40人)	10	168.8	1,688			教官控室	1	112.5	113		
学生控室		(0.9㎡/人)	720			(小計)			1,824	(㎡) 2,736	
教官控室	1	112.5	113			○自然共用					
共通資料室	1	56.3	56			講義室 A:40人	6	56.3	338		
(小計)			4,836	(㎡) 7,254	ネット面積×1.5	" B:80人	2	84.4	169		
○管理部門						演習室 (20人)	8	37.5	300		
学群長室	1	37.5	38			学生控室	(0.9㎡/人) 1	112.5	360		
学群運営教室	1	112.5	113			教官控室	1	112.5	113		
学群事務室	1	112.5	113			共通資料室	1	56.3	56		
会議室大	1	112.5	113			(小計)			1,336	(㎡) 2,004	
" 中	1	56.3	56			○自然コース専用(数学, 物理, 化学, 地球科学)					
" 小	2	28.1	56			実験室 A	4	188.8	755		
管理諸室	3	56.3	169			" B	21	135.1	2,837		
(小計)			658	(㎡) 987		" C	11	56.3	619		
○関連部門						" D	4	37.5	150		
学群図書室				(㎡) 1,200		" E	9	28.1	253		
学群食堂				(㎡) 1,600		共通資料室	4	56.3	225		
エネルギー・サ ブステーション				(㎡) 1,000		(小計)			4,839	(㎡) 7,259	
合 計				(㎡) 12,041		合 計				(㎡) 11,999	
						総 計				(㎡) 24,040	



整理を行うため、配置設計の検討をくり返したが、**Fig. 12.3.2**はその最終案である。

73年春から上述した基本計画を条件として、基本設計が始められた。基本設計は、より専門的な検討を行うために、第一工房および岡田新一設計事務所に委託されたが、その初期においては、この両者と基本計画をまとめた施設ワークとの3者による共同討議によって進められた。ここでは主として外部および内部の空間構成の方法について検討されたが、その結果の概要は次項に示すとおりである。

基本設計は73年10月にほぼ完了し、直ちに第Ⅰ期建設部分の実施設計を開始、翌74年3月には工事をスタートさせ、さらに翌80年4月にはこの部分を竣工した。また、第Ⅱ期部分の実施設計も第Ⅰ期着工とともに開始し、79年には工事着手、80年の夏休み中にこれも竣工した。このように、あわたたしいスケジュールながら、綱渡り的に、どうにか当初の予定にほぼ間に合うかたちで第1学群施設は完成したのである。

2. 設計計画の要旨

1) 配置設計の方針

マスター・プランには、キャンパスを貫くふたつの軸線があり、ひとつは北部コアの諸施設・空間を結ぶ軸であり、もうひとつは南部コアの体育・芸術専門学群を統合する軸である。第1学群ブロックはちょうどこのふたつの軸が交る点、すなわち動線的に言えば方向が変化する地点に位置する。このことはキャンパスの中で把えた場合、他のブロックとは異なる条件、性格をもった場所、ということができる。この「他とは異なる」という点に重きをおいて、第1学群の外部空間はデザインされ、建築の配置のしかたが検討された。

他の学群等においては、各建築は相互にまとめられ、集積されて、都市的なダイナミックなスケールの空間をつくるのが意図されているのに対して、第1学群のみはむしろ、建築を分散的に配置することによって、人間的なスケールで自然になじんだ外部空間をつくる、という方向が選択された。第1学群ブロックの中央部を南北に通過するストリート（ペDESTリアン・ウェイ）は、南部コアと北部コアを結ぶ大学全体のストリートでもあり、人びとがもっとも多く行きかう空間である。したがって、人工池やそのウォーター・フロント、ゆるやかに傾斜する芝生の広場といった外部空間の構成要素によって、ここが他の場所とは違う独得の場所である、という意識を呼びおこすような空間構成が意図されたのである。

2) 外部空間のヴォキャブラリイ

上記の第1学群ブロックの、全キャンパスにおける特異性を強調するために、地区の両端部にゲート空間を用意し、地区の入口として明確に位置づける計画とする。南のゲートは、メイン・ペデが南部コアから中央コアを通過し、県道学園平塚線をブリッジ（後に「桐葉橋」と名付けられた）で越えたところの左右の森である。右側は既存のアカマツ林を慎重に保存し、左側は空地なので、ここにシラカシ林を育成し

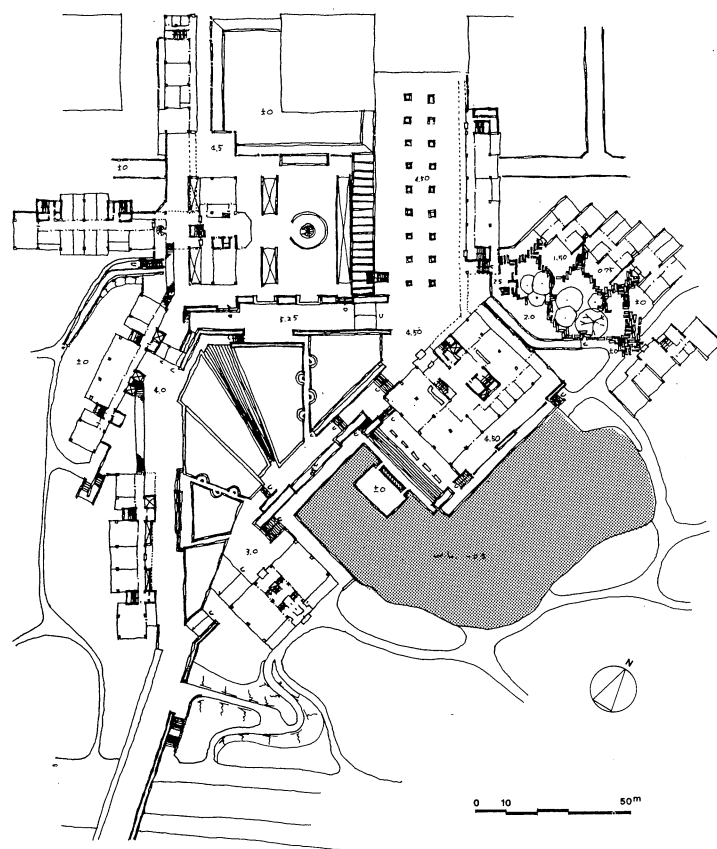


Fig. 12.3.2 第1学群配置計画 (原案)

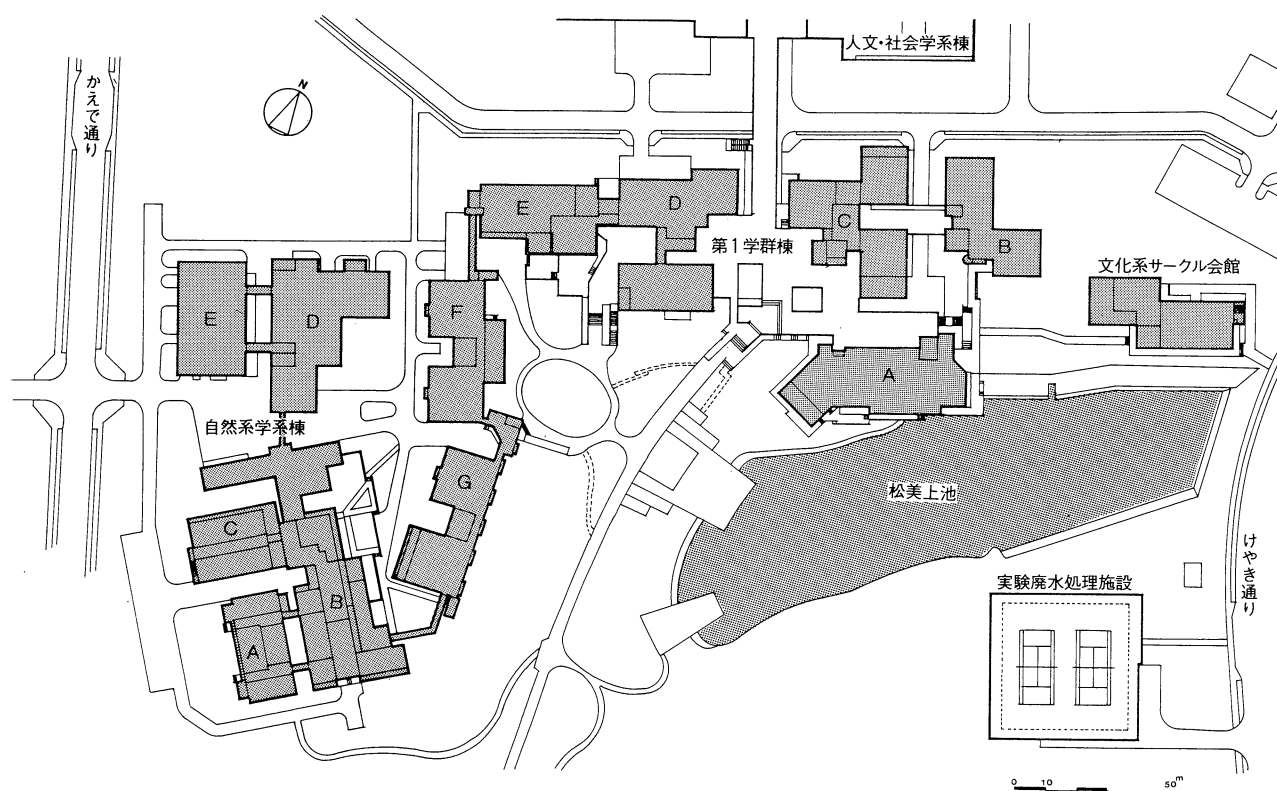
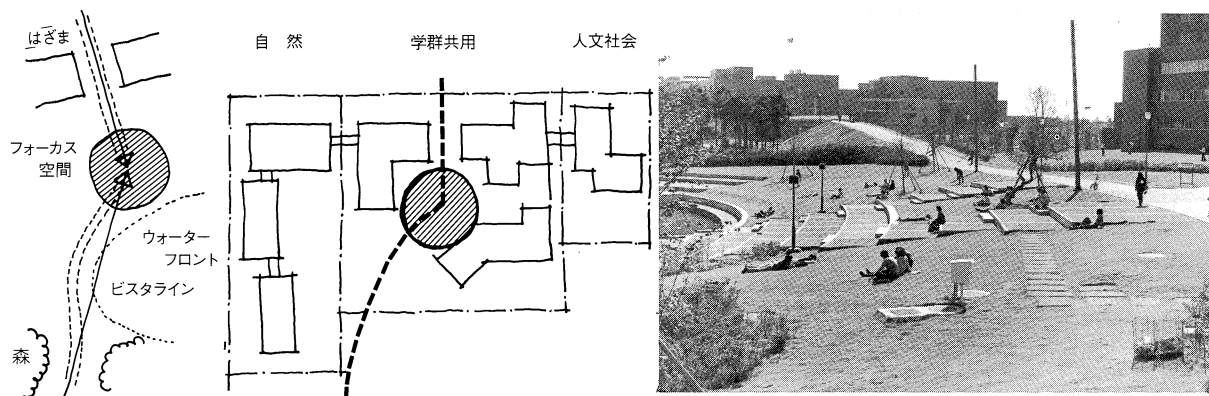


Fig. 12.3.3 第1学群ブロック配置図 (実施案)



ようとする。北のゲートは、北部コアの軸上に、ペデをはさんで建てられる建築（学群共用棟）2棟によって作り出される「はざま（狭間）」がこれにあたる。南のゲートでは、ウォーター・フロントに沿って新しいビスタを生み出すが、このビスタ・ラインと北からの軸の交点がフォーカス空間である。このスペースは、人工的にペープされ、適度に建物に囲まれたかたい広場、プラツァを形成する。ここは第1学群の中心であり、学生達がここに集まり、ここから各建物、各教室へと散ってゆくアクセスとしての広場である。南のゲートを通過したペデ動線は、フォーカスへ真直ぐ向くのではなく、やや左側をゆるやかに右側にカーブしながら、しかし常に心理的にはフォーカスに結びつけられたラインを描く。このペデ・ラインが通過する空間は、右側に人工池を、左側から正面にかけては角度を変えつつ配置された建物を控え、扇形の、しかも右に向ってゆるやかに傾斜する柔らかく囲まれた空間である。この柔らかい空間は、池の広場と呼ばれ、第1学群の広場であるとともに、キャンパス全体の広場であり、学園祭などの際の活動の中心となるが、それはこの広場が、唯一一つの自然を積極的に取り入れた広場として、高いアイデンティティをもっているからである。この広場のウォーター・フロントには、水への接近性を高めるために、池中まで連続するステップ（ベンチとして実によく利用される）が2ヶ所につくられた。

3) 建築の構成計画

学群の施設は **Tab. 12.3.1** に示すように多様であるが、これを建築として構成するにあたって、まず学群共用部分と専門教育部分とに2分し、専門部分は人文・社会と自然とに2分する。共用部分は、ペデルート上に、A, C, Dの3棟に分けてプラツァを囲んで配置することとし、プラツァの下には、基礎実験室、サブ・ステーション等を取り、A棟は学群図書室および食堂をまとめたもっとも共用性の高い棟で、人工池（松美池）のふちに配置された。この共用部分をはさんで、東に人文・社会専門棟B棟を、西に自然学類専門棟群を配置するが、自然専門棟は、関連する学系との関係、池の広場を形成することの2点から、自然学類共用部分と数学専門部分を合せてE棟とし、これを介して物理専門教育のF棟、化学および地球科学の専門教育部分を含むG棟の3棟から構成される。このように第1学群の建築は7棟に分散（うち共用部分の3棟は、1階レベルでは一体化されている）しているが、互に渡り廊下またはプラツァにより、2階レベルで結ばれている。また学群施設はウォーク・アップの原則に従って、A, F棟は3階、B, D, E, G棟は4階、C棟は5階という低層であるが、身障者の移動も考慮して、A, B, C, E, Gの各棟にはエレベーターを設け、全ての教室に到達可能な計画とし、さらにスロープを用意した。

以上が第1学群施設の計画プロセスおよびその設計意図であり、こうしてまとめられた配置計画（実現したもの）が **Fig. 12.3.3** であり、メイン・レベル（建築は2F）の平面図が **Fig. 12.3.4** である。このブロックには、第1学群の建築の他に、自然学類専門教育棟の西側に、これに関連する数学、物理学、化学、地球科学の各学系を含む自然学系棟（約22,000 m²）が、人文社会学類専門教育棟の東側に文化系サークル会館（ク

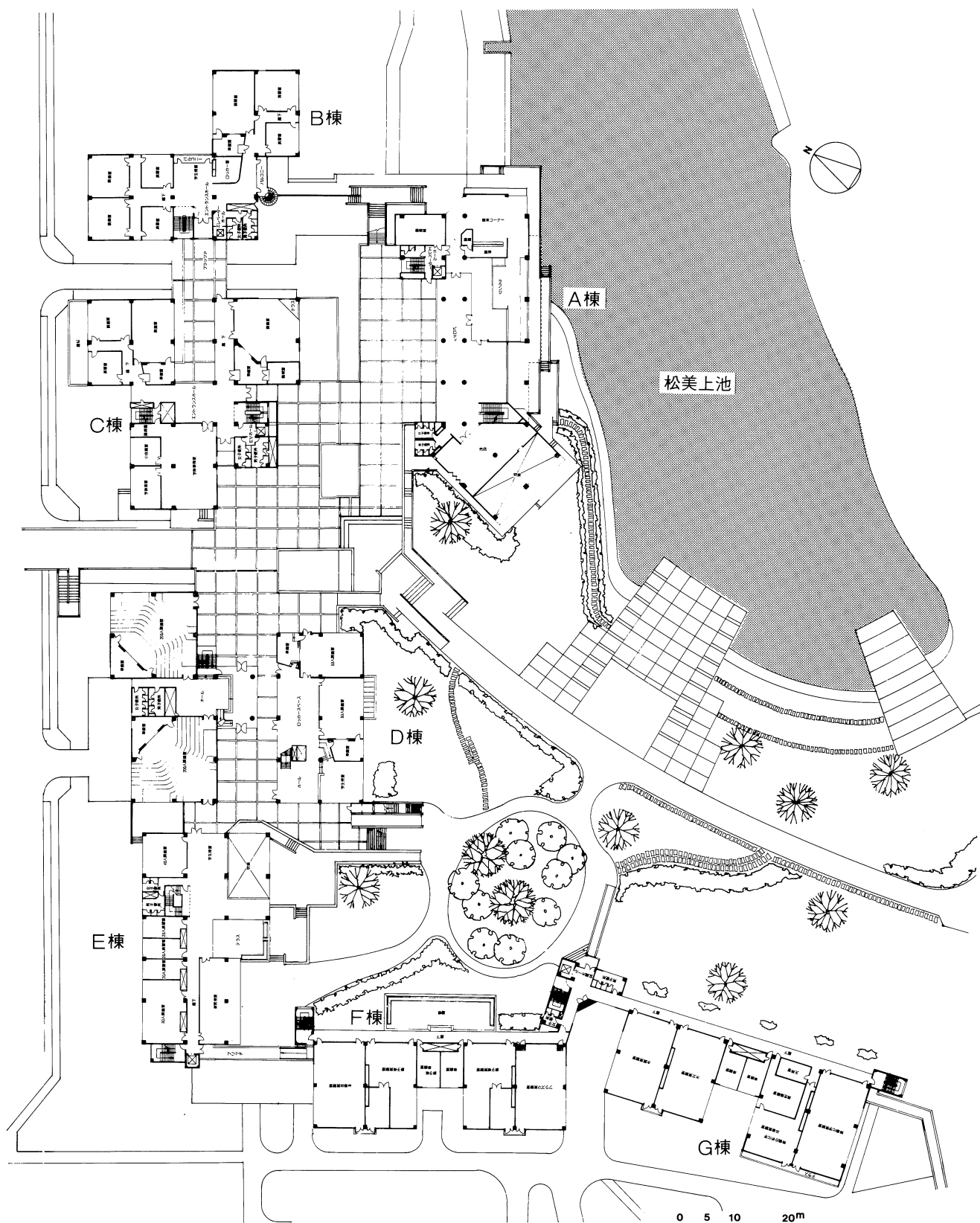
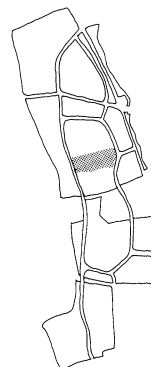


Fig. 12.3.4 第1学群主階平面図 (2 F)

ラブ室群)が、そして松美池をはさんだ南側には、全学の実験廃水を集める処理施設(地上部はテニスコートとして利用される)がそれぞれ置かれている。



設計 建築 岡田新一
栗原嘉一郎
広場 土肥博至

12.4 北部コア・中央図書館ブロック

北部コアの中央部にあたるこのブロックは、ミカゲ石を敷きつめた石の広場を中心に、中央図書館、人文社会学系棟、人間系学系棟、文科系修士棟、理科系修士棟の5つの建築群がコの字型にとり囲んだ構成で、北の辺だけがオープンとなっており、第2および第3学群ゾーンへと連続するプランとなっている。南からのメインペデは、この空間で2本の流れに分けられ、中央広場の東西側を平行して走り、このブロックの北端で2階レベルから1階レベルへと高さを変化させてゆく。中央広場は、石の広場（2Fレベル）から芝生の斜面（将来は滝とカスケードが建設される予定）を経て、第2、第3学群の間を流れる流れの広場へとつづく、長さ約300 m、巾50~65 mの長大な連続広場で、この大学最大のシンボル・スペースである。

中心建築である中央図書館は、1階、中2階が開架書庫で、2階がメインフロアとなっており、ここに貸出しカウンター、レファレンス、検索、ブラウジング、A・V室などの他一般書籍が配置され、3~5階はそれぞれ人文系、社会系、理工系の専門書が置かれて、全面開架式の画期的なシステムをとっている。また、文科系の全学系（8学系）が図書館との関係を重視してこのブロックに置かれるほか、文科系および理科系の修士大学院の建築および共同研究棟が置かれて、ひとつの教育研究の中心ブロックを構成している。

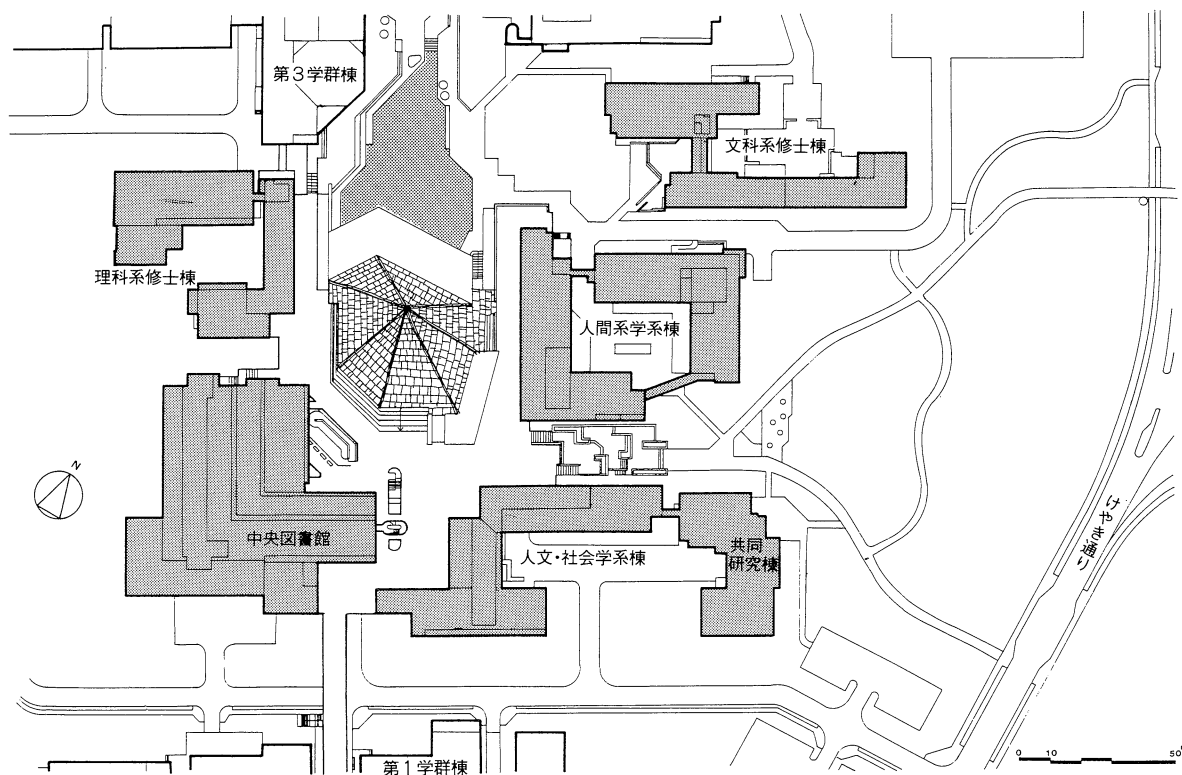


Fig. 12.4.1 中央図書館ブロック配置図

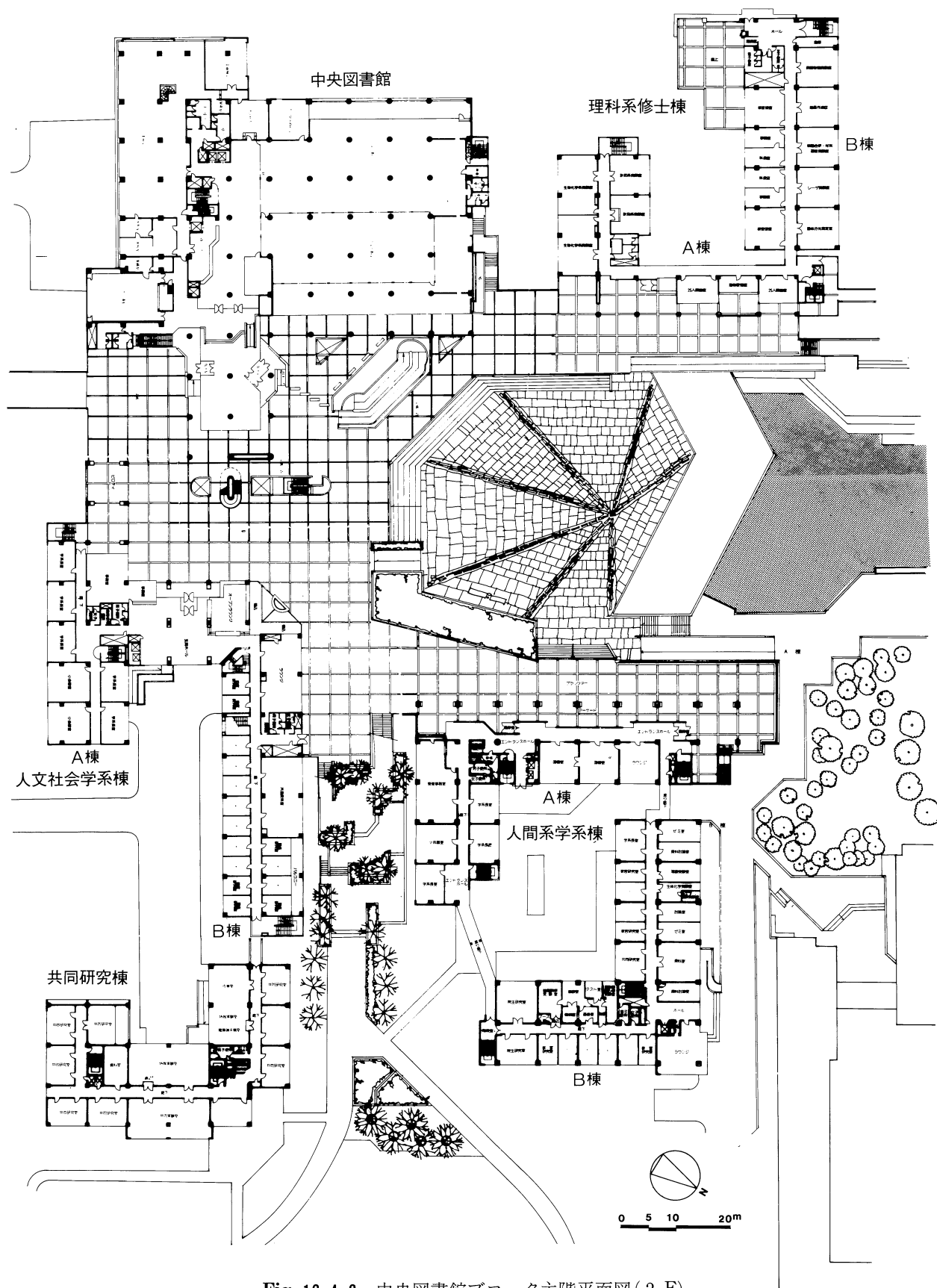
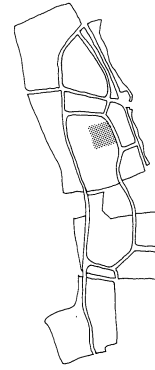


Fig. 12.4.2 中央図書館ブロック主階平面図(2 F)



設計 建築 高橋 健一
広場 土肥 博至
小野 敬也

12.5 北部コア・第2学群ブロック

第2学群ブロックは、第2学群およびこれに関連した理科系の学系である生物農林学系（4学系）の建築から構成されている。第2学群棟は、第1学群と同様、学群全体の共通部分と、比較文化、人間(教育)、生物、農林の各専門分野に対応した部分とで計画されているが、建築形態上は、第1学群のような分散的な形式でなく、連続した形式を採用している。また学群棟と学系棟との関係も、第1学群の場合よりも緊密な関係とし、屋内で移動できるよう計画されている。

ブロックの西側の中央広場よりを正面とし、これに面して学群棟を配置し、東側の奥まった側に学系棟を置いた構成である。学群棟の西面は、アーバン・デザイン上の焦点として、中央広場のデザインとの調和を重視し、レンガ色のモザイク・タイル貼とするほか、柱列の配置、窓のデザイン、壁面の屈折やセット・バックなど、ヒューマン・スケールにブレイク・ダウンされたキメの細かい配慮がなされている。また、南北160 mの長大な学群棟の中央部に、学群・学系に引き込むメイン・アクセスを計画している。

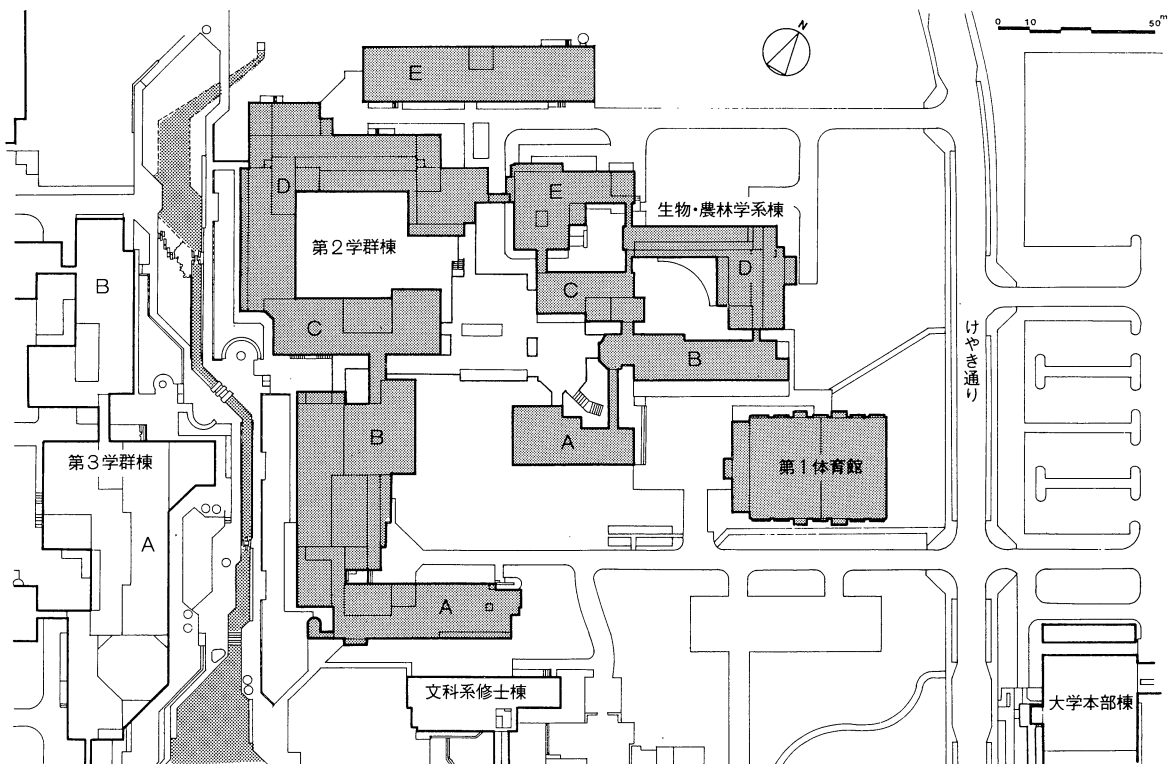


Fig. 12.5.1 第2学群ブロック配置図

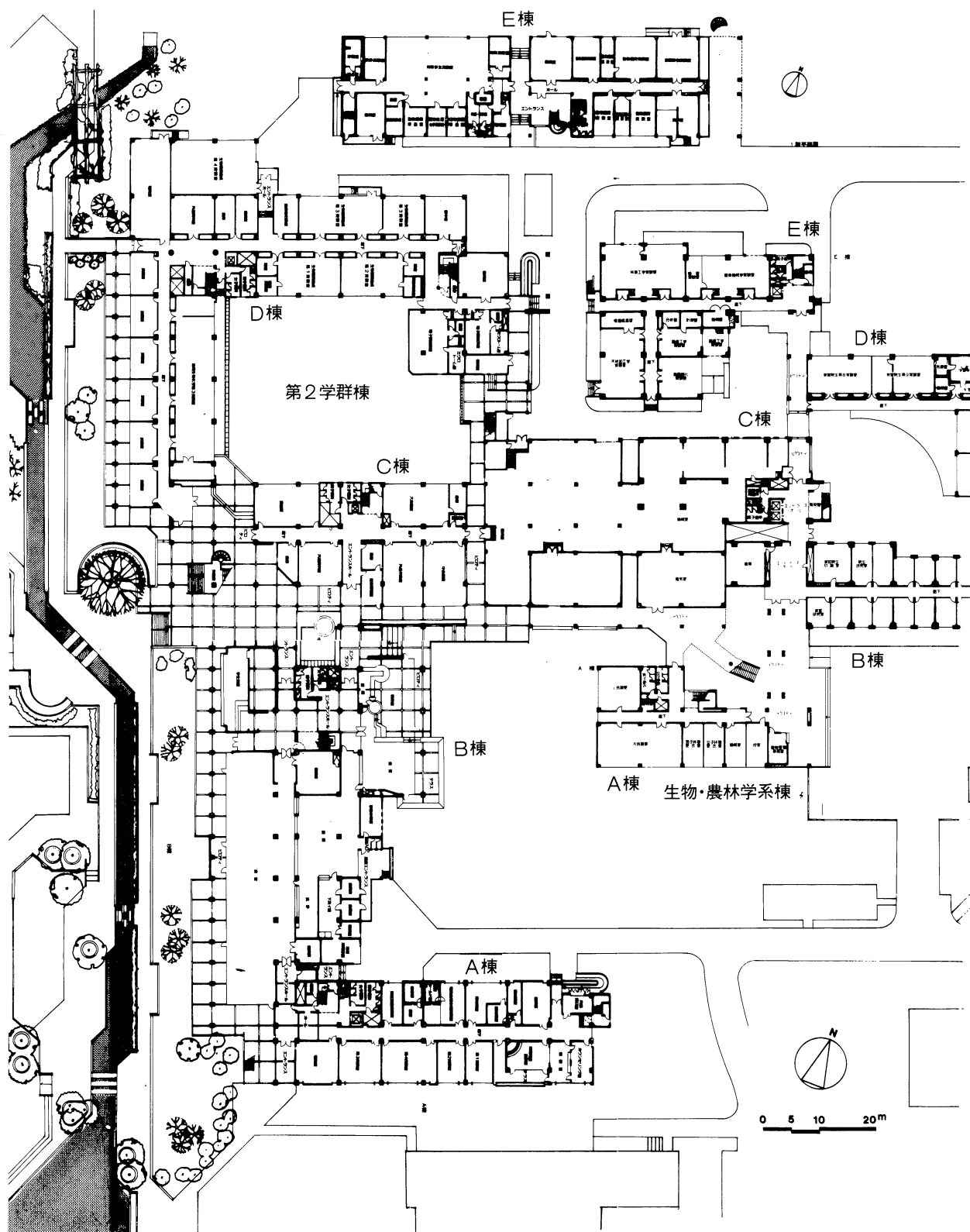
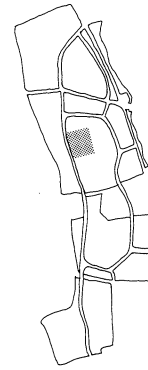


Fig. 12.5.2 第2学群主階平面图 (1 F)



設計 建築 高橋 静一
 広場 土肥 博至
 小野 敬也

12.6 北部コア・第3学群ブロック

第3学群ブロックは、第3学群および関連する工学系5学系の学系施設で構成されている。しかし、学群が24,000 m²、学棟が30,000 m²といずれも巨大な建築であり、これを分散的に計画したのでは広範囲に広がってまとまりが失われるため、最も高密度なブロックとして計画されることになった。また、学群と学系の関係もこのブロックがもっとも一住的なものとなり、全体として田の字型の構成をとっている。そして学系棟の中心となるF棟は、キャンパスで最高の12階の高層建築としてデザインされた。

東側の中央広場に対して、学群棟が前面に置かれ、学系棟を西側に配した構成は第2学群ブロックの裏返しである。中央広場に面した裏面は、第2学群棟の西面と向き合って、特色ある通り空間をつくり出すように、相呼応してデザインされている。学群棟はA～Dの4棟から成るが、学生ラウンジ、学群図書館、食堂や小食堂群、売店、大講義室などの共通的なスペースはすべてA棟にまとめられており、B棟は講義室棟、C棟は社会学、情報工学の両分野、D棟は基礎工学のそれぞれ専門教育の実験室棟である。

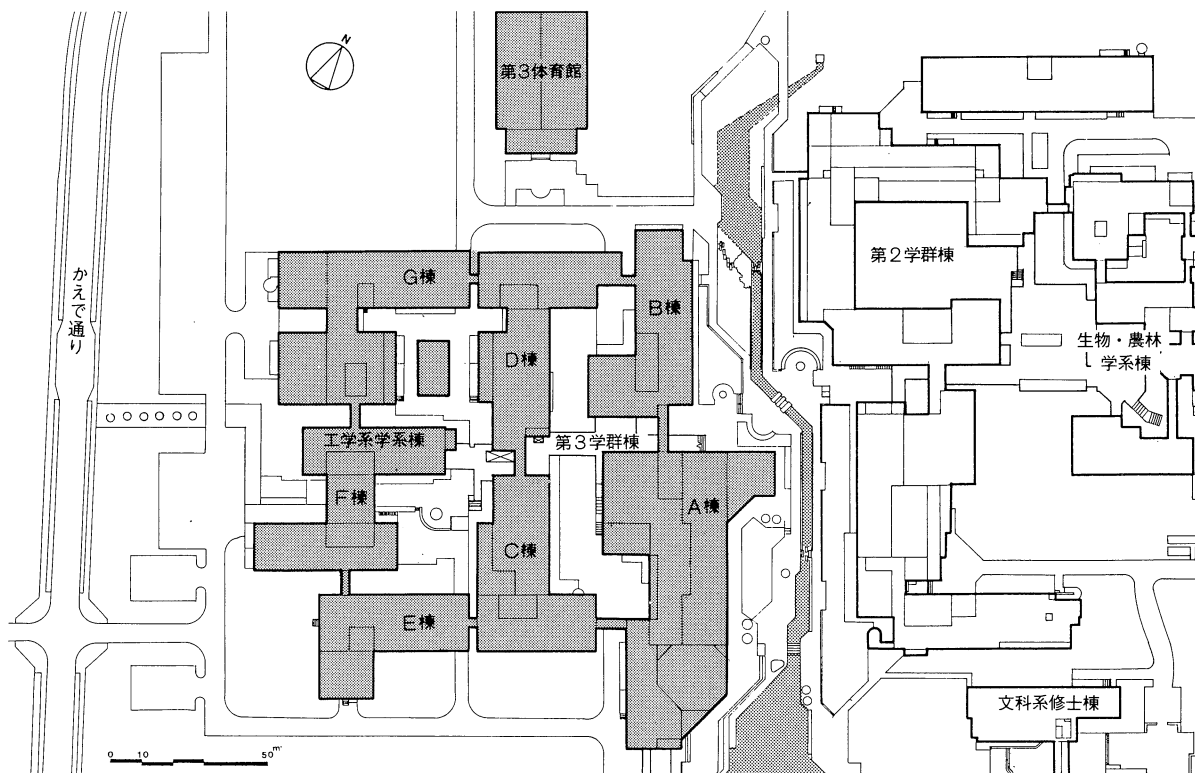


Fig. 12.6.1 第3学群ブロック配置図

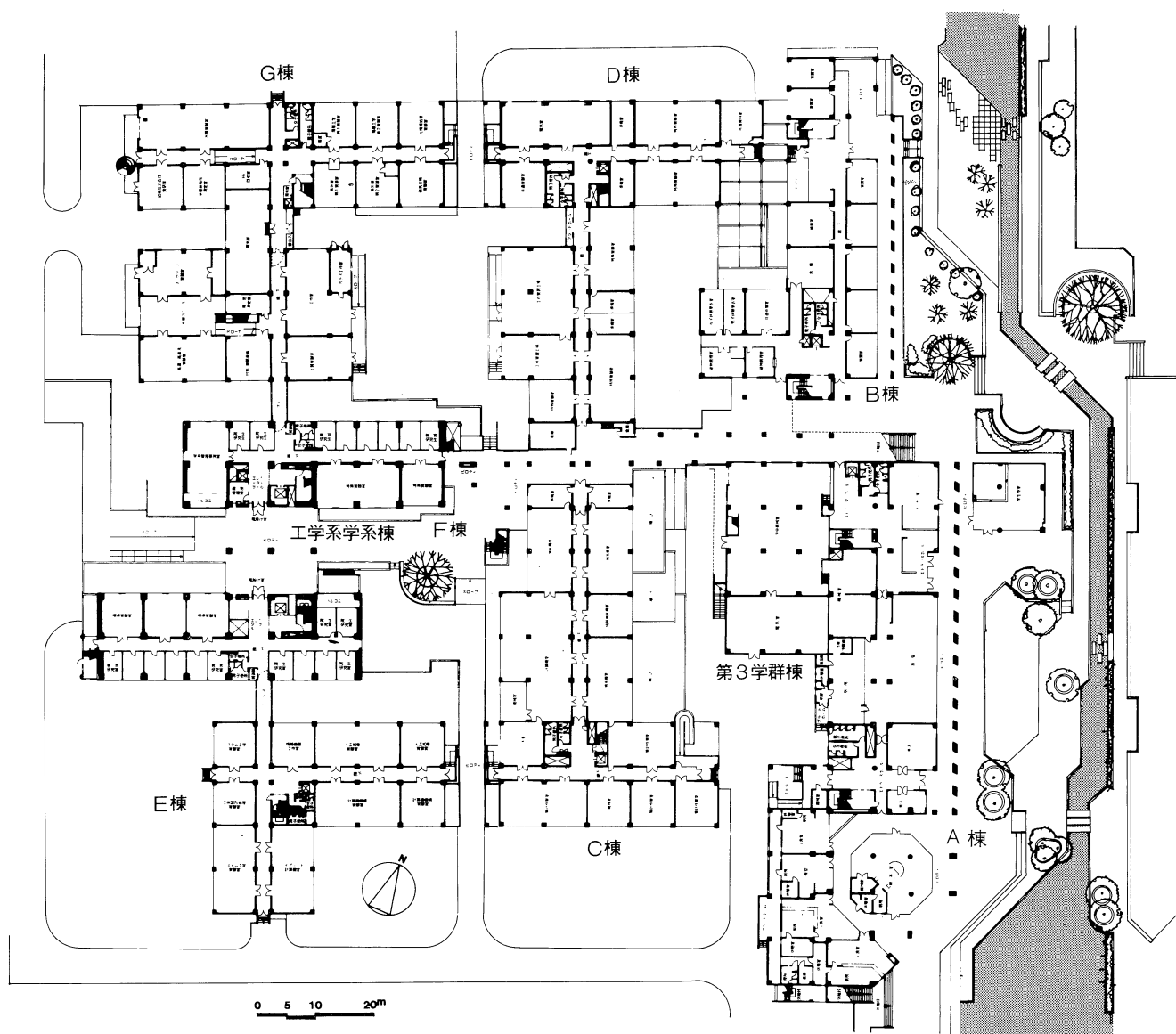
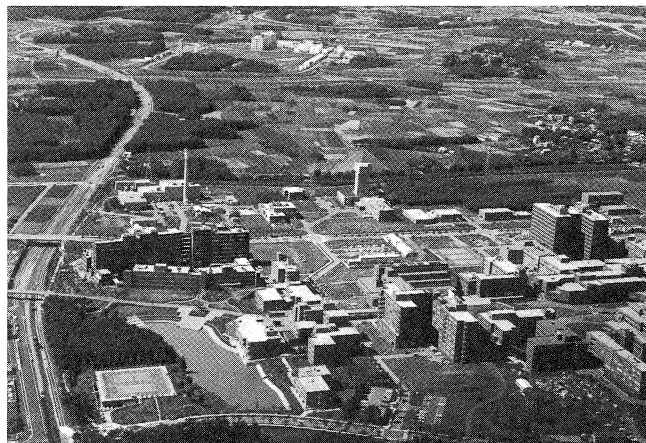
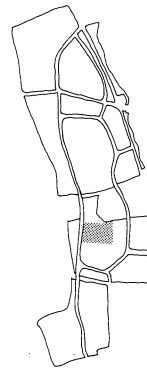


Fig. 12.6.2 第3学群主階平面图 (1 F)



設計 建築 槇 文彦
堀内春夫
広場 土肥博至

12.7 南部コア

最初に計画された南部コアは、体育芸術中央棟、芸術学群棟、同学系棟、同工房、体育学系棟、総合体育館、体育芸術図書館、同食堂、体育センター、屋内プール等が、それぞれ独立建築として建ち、これらを2階レベルに計画されたペDESTリアン・デッキや広場が結びつける、という構成になっており、このブロックはそれだけであたかも小大学のような様相を呈している。中央の広場はベデ・レベルからサンクした2つの小広場の連結形で、南半だけが完成しており、北半は未完である。

体芸中央棟は、機能と空間の複合化を狙いとするキャンパス・デザインの典型ともいえる建築で、東西に長い棟の中央部を南北にメイン・ペデが貫通して内部・外部の複合化が計られており、この建物の焦点をなしている。機能的にも、体育と芸術という異質な分野の共通性の高いスペースや共同利用の可能な講義室、また芸術の大石膏室のようなシンボリックなスペースをこの建築に集合させ、分野による独自の領域の確保という、旧来の大学デザインの行き方に挑戦している。

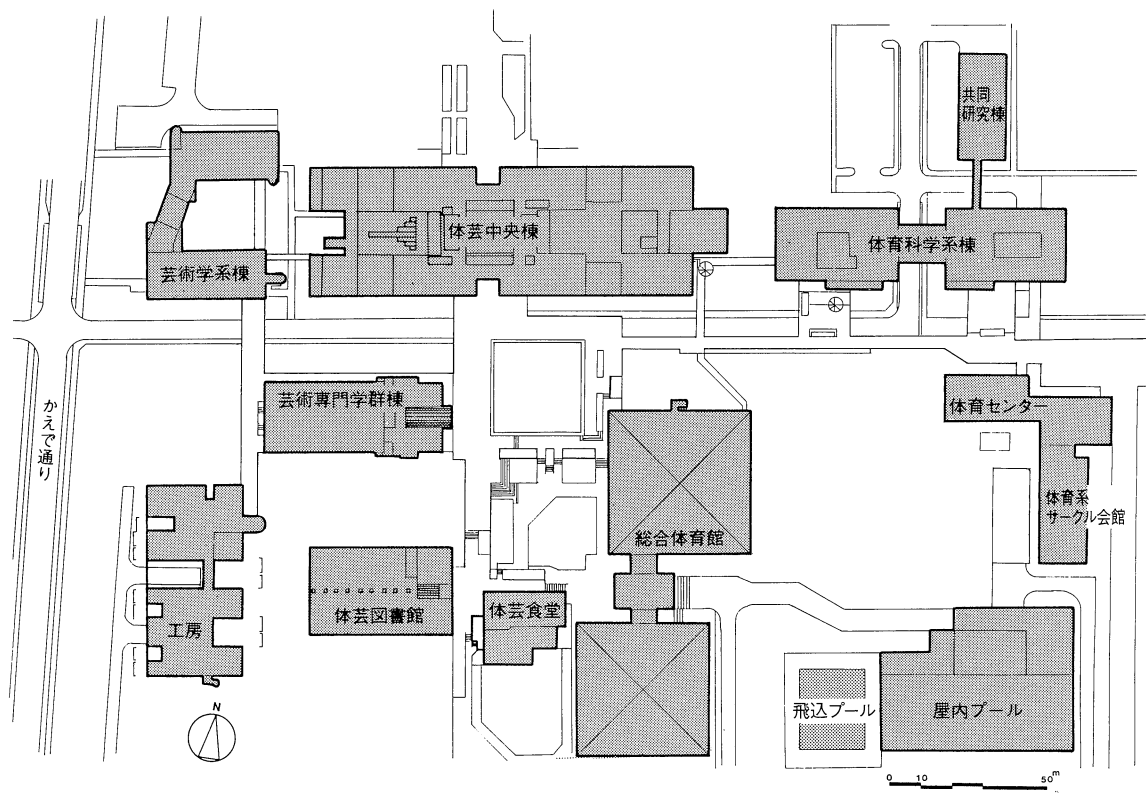


Fig. 12.7.1 南部コア配置図

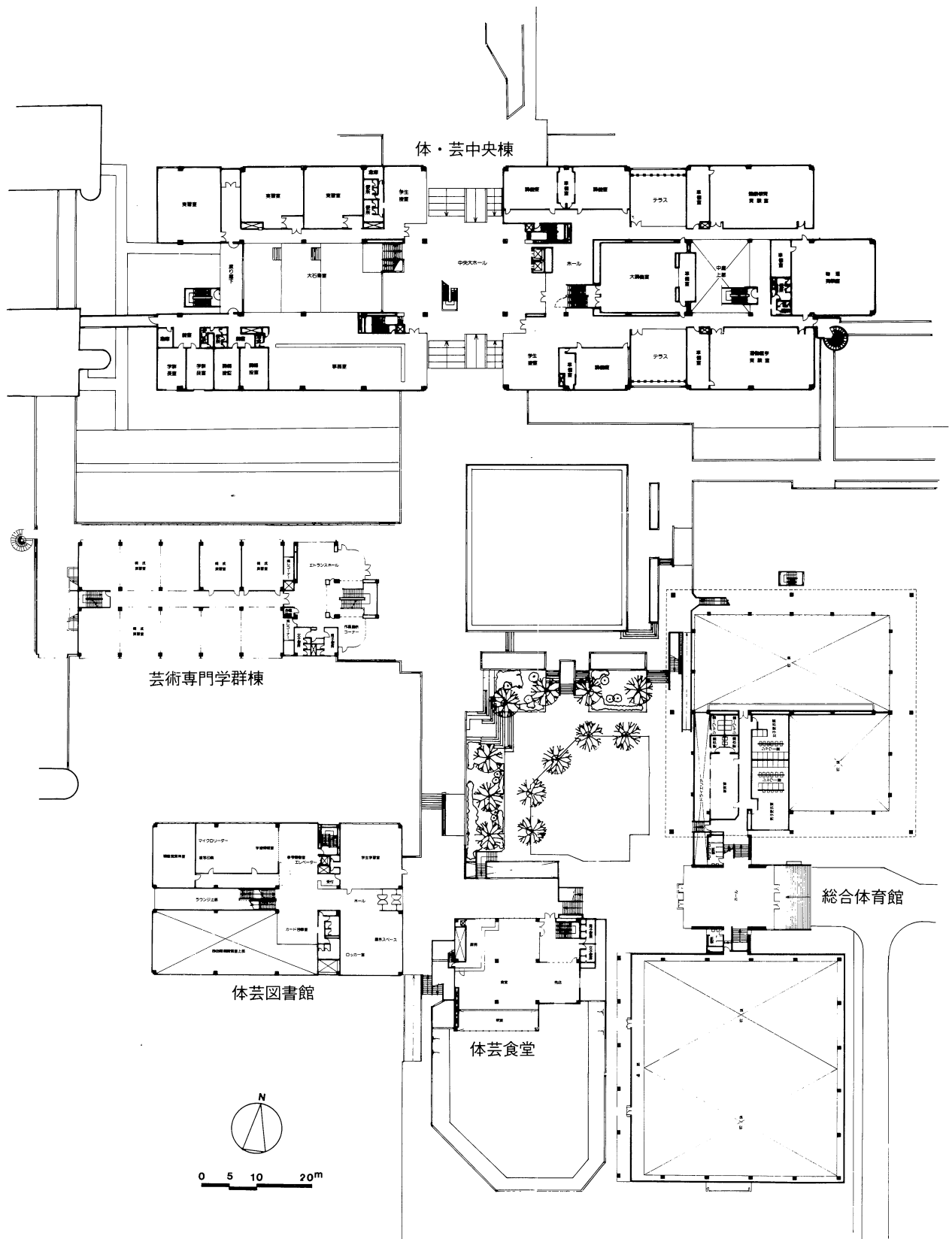
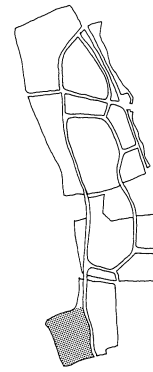


Fig. 12.7.2 南部コア中心部主階平面図 (2 F)



設計 建築 浦 良一
伊藤 誠
山下 設計
外部 土肥 博至

12.8 医学コア

医学コアは、他のアカデミック・コアとは、位置的に離れているだけでなく、その機能の独自性も強い。すなわち、メディカル・コンプレックスとして、附属病院を中心として構成されるものであり、病院の利用という点が第1義的に重視されることから、キャンパスの中で都市の中心部にもっとも近い南端部に位置しているのである。コアを構成している建築群は、附属病院の他に、医学専門学群、医学系3学系の入学系棟、医学図書館・臨床講堂棟、食堂であり、周辺には医学に関連の深い動物実験センター、医科学修士棟、医療技術短大の施設が配置されている。

コアの空間構成は、構成する各施設間の関連性の強弱と動線計画上の条件とから決定されており（下図参照）、地区の西半が病院ブロック、東半分に教育・研究と関連施設からなる医学学群ブロックとなっている。病院ブロックは、大学全体の動線網とは独立した、病院専用の進入道路を南側から取り付け、患者の利用に供するとともに、病院への交通によって学内環境が影響されないように配慮されている。また、病院への資材搬入等のサービス・アクセスは患者動線とは別に、地区の西側（学園西大通り線）から行う。さらに病院スタッフのアクセスは大学の道路網から分岐して北側から、また歩行者やバス利用者は専用路によって東側から、というように明確に分離されている。病院は、病棟（600床地下1階、地上11階、下部は管理部門から成る）、新病棟（増築200床6階）、外来診療棟（地下1階、地上4階）、中央診療棟（地下1階、地上4階）、特殊診療棟（2階）の5棟から成り、総面積6万m²近い大病院であるが、すべての棟は内部ブリッジによって一体化されている。

学群ブロックは、大学のメインペデから分岐して2階レベルで東から伸びてくる歩行者専用路が、このブロックの中央部で広場（アカシア広場）を形成し、この広場をとり囲むように北に学群棟（4階）、学系棟（地下1階、地上8階）、南に食堂棟（2階）、図書館・臨床講堂棟（3階）が配置されている。学系と学群は建物内部で連結され、さらに学系棟は病院の中心部に各階ブリッジによって直結されている。これらの施設への車のアクセスは、学内幹線道路（東側）から分岐される2本のアクセス道路によって行われる。

医学コア地区は、容積率ですでに100%をこえているが、病院の各部分、学系棟、学群棟についてはそれぞれ将来増築用の土地を保留しており、最終的には、150%程度までは可能な計画となっている。また、この地区は、24時間エネルギー・サービスの必要な病室があることもあって、中央プラントとは別の、この地区だけのサブ・プラントを持っている。

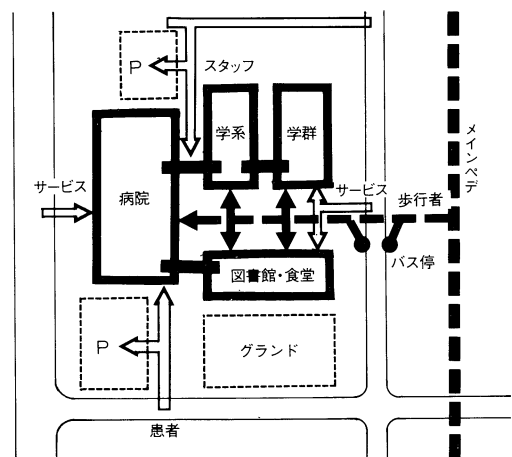


Fig. 12.8.1 医学コア空間構成ダイアグラム

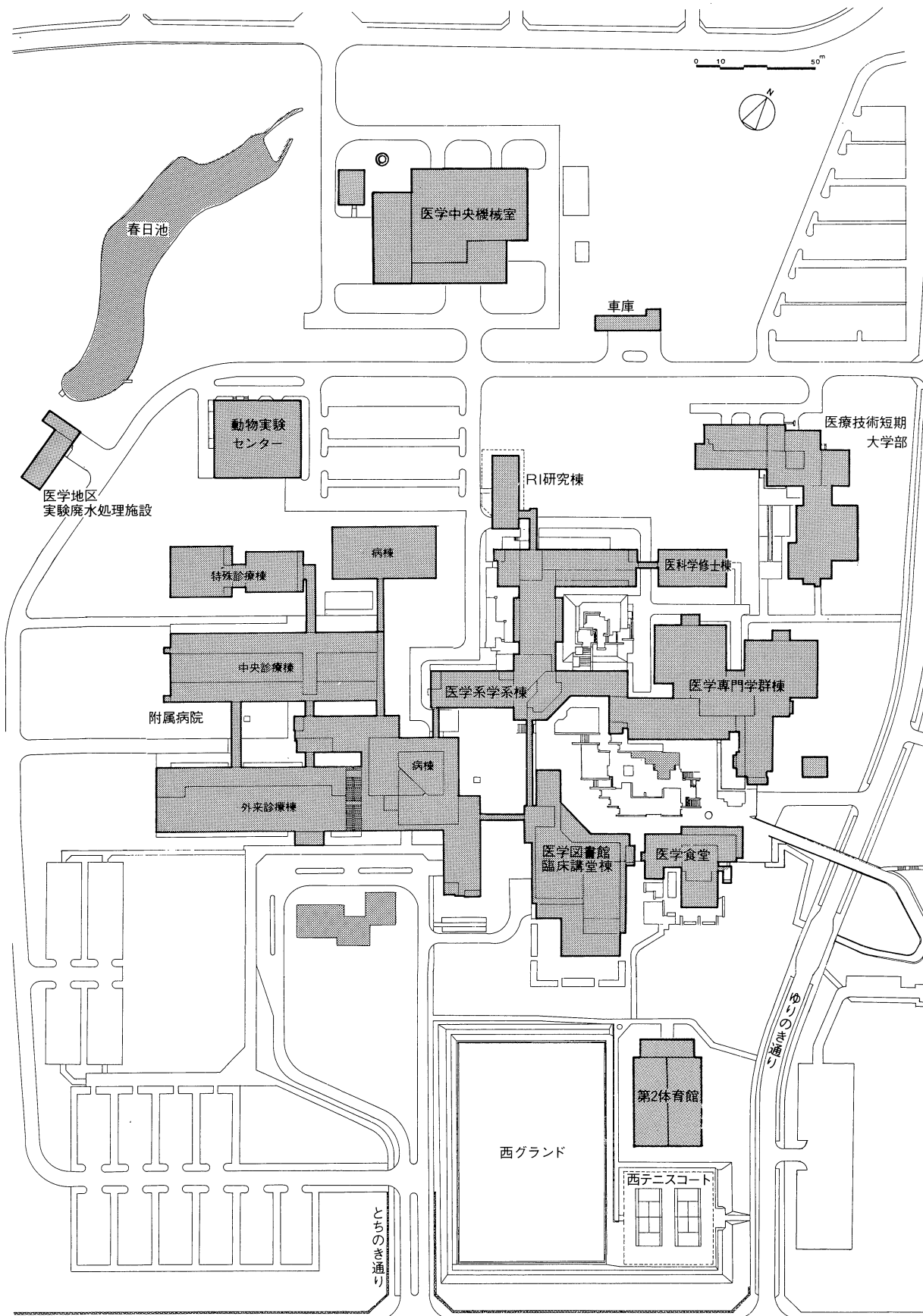


Fig. 12.8.2 医学コア配置図

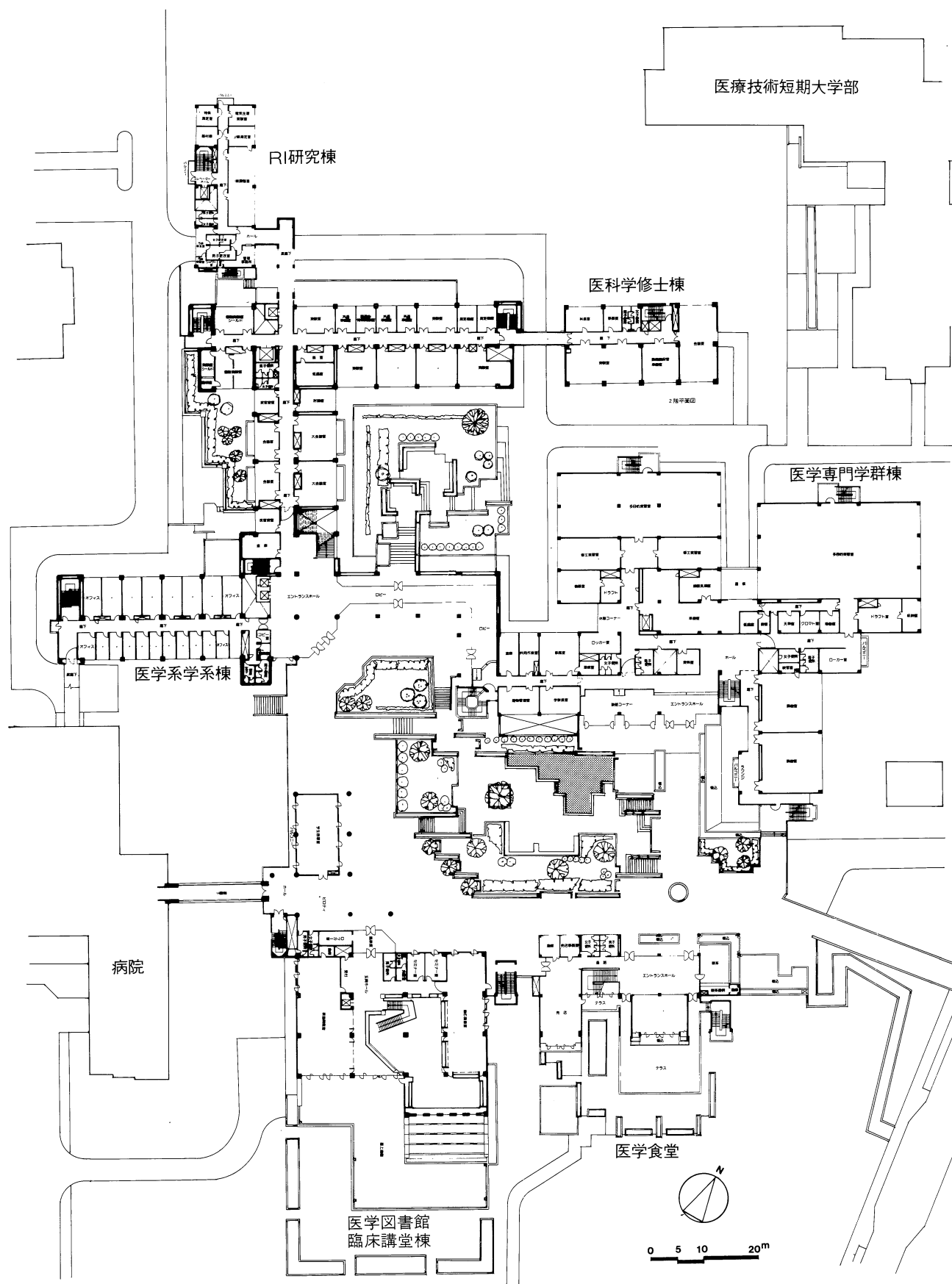


Fig. 12.8.3 医学専門学群・学系主階平面図(2 F)

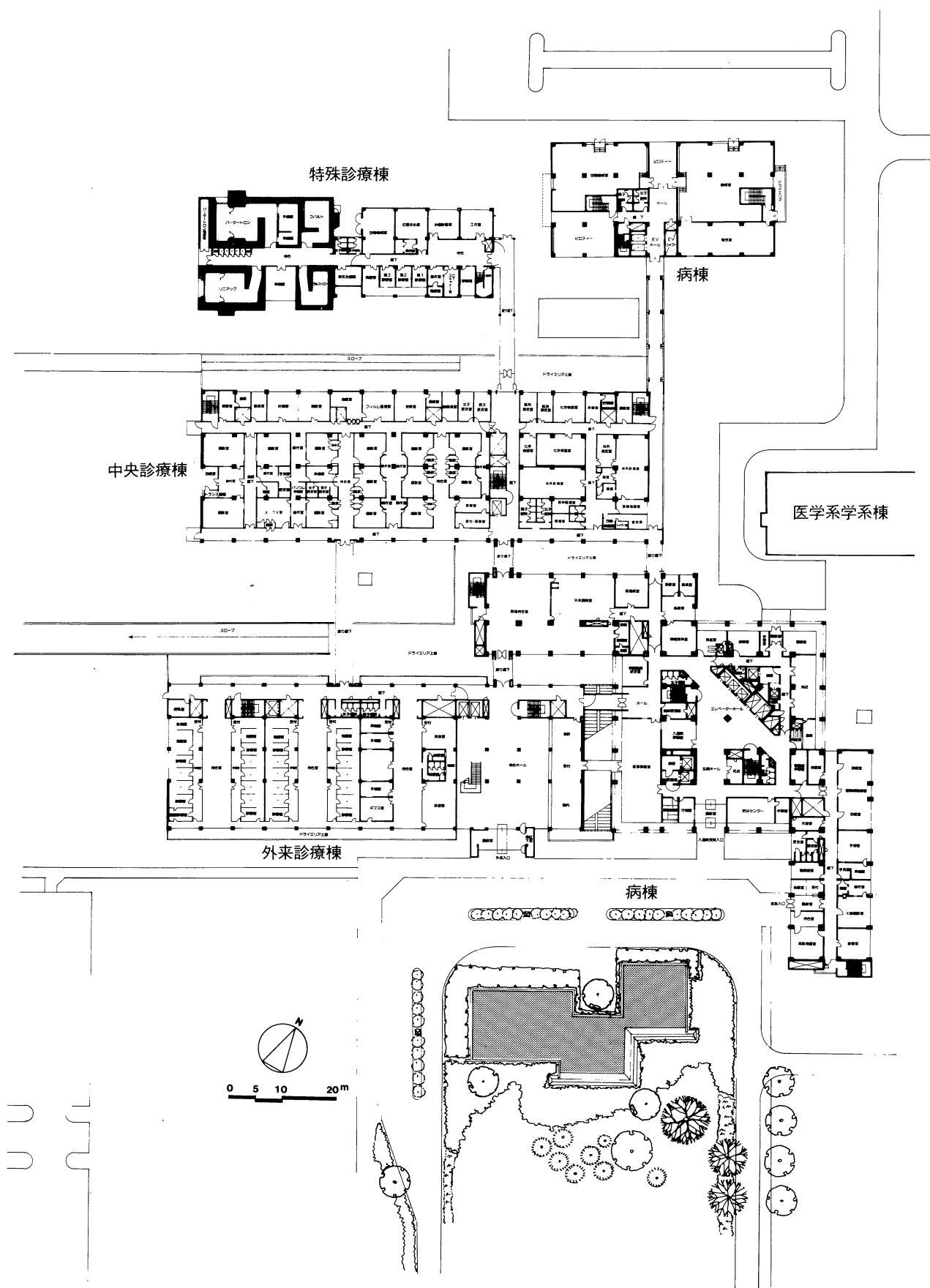


Fig. 12.8.4 附属病院主階平面図 (1 F)